フィールド(現場)からの風 (121)

宮澤守男

地域の歴史的遺産や文化的遺産が地域を活性化させることに関心を持ちませんか

10月中旬、長野県長寿社会開発センター大北支部が開講した、長野県地域いきいき塾の修了生で下伊那郡阿智村を訪ねる。塾を修了してもお互い学んで行こうと願い合った仲間だ。その生き方は、これからも年を重ねるごとに貴重なものになるだろう。

初めに訪れたのは「満蒙(まんもう)開拓平和記念館」。昨年4月に開館した施設だ。

私の知る「開拓」は、太平洋戦争が終戦になり、軍隊から多くの若者が故郷に帰ってきた。しかし次男・三男…などに分け与えられる農地は限られ、また食糧不足解消や失業対策などを目的とした農地開墾を「開拓事業」として国の事業が行われた。白馬村でも2か所実施された歴史がある。私の幼年期でさえ、その生活の苦しさが理解できるほどだった事を今も鮮明に覚えている。

「開拓」とは何だったのだろうか、との興味も有り研修会に参加。展示内容は、中国東北地方に、13年間だけ存在した幻の国「満州国」に、日本から14年間で約27万人の農業移民「満蒙開拓団」の歴史を後世に伝える事を目的とした内容だった。当時の日本農村社会の貧困さ。当初満州国に500万人の移住計画のあった事。夢を抱き新天地目指した青年たち。突然のソ連侵攻で戦場化した開拓地。日本・中国に多くの犠牲者を出した歴史。展示された写真は、想像を超える貧困の惨状。この困難さを後世に伝えようと書き残した文献を大勢の人たちが読み込む姿。平和な社会とは何かを改めて考える機会だった。

施設は、民間団体が運営、入館料とピースサポーターの寄付で経営は黒字と聞くが、展示内容から、今後の維持運営が大きな課題な事も事実だが、開館に至った情熱には頭が下がる思いだった。

展示パネル「未来に向かって」の文面「あの時代に問いかけてみます。なぜ、『満州』へいったのですか。今を生きるあなたに問いかけてみます。あの時代に生きていたら、どうしますか。日本と中国双方の人々に多くの犠牲を出した『満蒙開拓』とは何だったのでしょうか。長く人々の心の奥に閉ざされていた記憶に寄り添い、向き合いにくい真実に目を向ける時がきました。この歴史から何を学ぶのか、私たちは問われています。『負の遺産』を『正の遺産』へと置き換えていくこと、その英知が私たちに問われています。歴史に学び、今を見つめ、未来をつくる。同じ過ちをくりかえさないために。平和な社会を築くために。

多くを語らなくても、これを読むだけで、心に訴えかける内容だった。

次に訪れたのが、平成17年12月に国土の歴史的景観に寄与しているものとして、国登録有形文化財に指定された杵原(きねはら)学校(旧山本中学校)だ。駐車場に到着すると2人の女性スタッフが笑顔でのお出迎え。案内され校舎に入る。廊下の展示写真の校舎と桜満開のスナップで何処を訪れたか分かるほどの予備知識の無い場所。旧職員室に用意された子どもたちの席に座ると、スタッフが先生役に早変わり。参加者の一人が級長役に。鐘を鳴らし、「起立・礼・着席」の号令。学生気分にさせてしまう。

1限時を10分とする工夫。最初は「歴史の時間」で施設の説明。2時限は「音楽の時間」で唱歌を大合唱。年配の団体の方が、楽しそうに大きな声で歌うとほほ笑む。地域の文化をこどもたちにつなぐ杵原学校応援団が展開している活動の一コマだ。

中学校統合で地区内の賛否両派による対立の末の廃校。それから始まった地域の保全活動。児童・生徒・保護者を対象とした教室の開催。地域住民が学び合う「山本学講座」の開催。南信州観光公社等との連携による活用。それらによって平成21年には、地区民の念願だった校舎の大規模改修と多目的ホールの完成。地域の真剣な取り組みが、地域を生き生きとした現場に出合うことができた。

観光にどちらかと言えば縁の無かった阿智村に大勢のお客様が訪れている。どちらかと言えば、高齢者をターゲットにした内容。知恵が地域にとって必要な事だと改めて知る。私たち大北地域にも光を与えれば輝く原石遺産はあるはずだ。ぜひ生かしてほしいと思った研修でもあった。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

歴史的現実に向き合うと、全員がこれからの平和について考えてしまう